

## 「言説的サイト」概念の批判的検討

東京大学 河 珠彦

本発表は、アメリカの美術史家ミウオン・クオンが提示した「言説的サイト」概念について批判的に検討するものである。

クオンの著書 *One Place After Another: Site-Specific Art and Locational Identity* (2002) は、ミニマル・アート以降のサイト・スペシフィシティの系譜を三つのパラダイムに分けて提示したことで最も良く知られている。その中でも特徴的なのは、比較的最近の実践を特徴づける「言説的サイト」の概念である。クオンはニュー・ジャンル・パブリック・アートという、今日ソーシャリー・エンゲイジド・アートと呼ばれているものとも大きく重なる芸術実践に注目する。このような実践において「サイト」は「物理的位置」から「言説的ベクトル」に変化したとクオンは言うが、この「言説的ベクトル」は、ある場所における歴史や記憶など、特定の場所にまつわる言説を指すものではない。クオンによると「言説的サイト」が指すものは、特定の場所に縛られない「文化的論争、理論的概念、社会問題、政治問題、(美術制度に限られない) 制度的枠組み」などであり、例えば「生態学的危機、ホームレス、AIDS、ホモフォビア、人種差別、性差別」などを含む。クオンによると、今日のサイト・スペシフィックな芸術実践が取り組む「サイト」とはまさにこの「言説的サイト」である。この「言説的サイト」の提示は、サイト・スペシフィックな芸術実践の歴史的展開を捉えようとするクオンの議論において核となる部分といっても過言ではない。

このような「言説的サイト」概念は、必ずしも場所の物理的側面に縛られないような、サイト・スペシフィックな芸術実践の今日的なあり方がある程度的確に捉えてはいるものの、いくつかの批判に直面している。特に問題に思われるのは、この概念における「サイト」がもはや現実の場所と結びつかなくなった点である。この点はすでに数人の論者によって指摘されており、例えば T.J. デモスはクオンの「言説的サイト」の議論の限界として「作品が物質的な実践と歴史性から完全に引き離されているように見える」点を挙げている。本発表はこのような批判に同意しつつ、クオンの議論の批判的検討を行ったうえで、社会に関与しようとする今日の芸術実践がどのように場所と関わりうるかについて考察する。

これを行うために、本発表ではまず「言説的サイト」の内実を、それがその他のクオンの議論にどのようにつながるかを含めて詳細に検討する。そのうえで、クオンの議論に対してなされている T.J. デモスとジェイソン・ガイガーの批判を検討し、それらを部分的に受け入れながら、クオンの議論における問題点を指摘する。最後に、グラント・ケスターによるコラボレーティブ・アートと場所との関わりについての議論を参照しつつ、クオンの議論の修正を試みる。